

興福寺一乗院跡の調査

—第350・351次

1 はじめに

今次の発掘調査は、奈良地方・家庭・簡易裁判所の建て替えにともない、第317次、第321次、第328次、第330次調査を受けるかたちで、本庁舎部分に対して実施したもので、一連の調査の総括的な意味合いをもつとともに、遺跡の全体像の把握が期待された。調査地は奈良市登大路町35、平城京の左京三条七坊に位置する。ここには興福寺の子院一乗院があった。

一乗院は天禄元年（970）頃の創建とされ、以後、藤原摂関家の子弟が代々入室し、大乘院と並ぶ門跡寺院として長きにわたり栄華を誇った。その間、幾度となく火災にあいながらも、復興を繰り返し、明治9年（1876）に裁判所に移管されるまで、その格式を保ってきた。裁判所になって以後も使用され続けた慶安3年（1650）建造の宸殿は、昭和38年に新庁舎建て替えに先立って唐招提寺に移築された。これが現在の御影堂である。

この時にも、庁舎部分を中心として短期間だが奈良国立文化財研究所により発掘調査が行われている（『重要文化財 旧一乗院宸殿・殿上及び玄関移築工事報告書』奈良県1964）。その時、慶安宸殿の前身である寛永焼失前の寝殿が検出され、また現在重要文化財に指定されている三彩陶器群も下層の遺構から出土している。

それから40年を経て再び鉄筋庁舎を建て替える必要が生じ、それにともない調査されることとなった。なお、40年前の調査は前身建物の解明に調査の主眼が置かれたもので、遺跡全体に対しては不十分なものであったため、それと重複する範囲についても調査を行っている。

調査自体は9月25・26日に庁舎基礎部分の一部試掘（第351次調査）とともに、本調査範囲の重機による土除去を行い、10月2日より発掘作業を開始した（第350次調査）。当初は旧庁舎をはさんで北側の、第330次調査区に接する部分（北調査区）と、庁舎の南側（南調査区）の二箇所を発掘する予定であったが、その後、井桁状に遺構を切り込んでいる旧庁舎基礎の間にも遺構が残存していることがわかったので、計画を変更して必要な部分に関しても合わせて調査を行った。調査面積は計900㎡である（図162）。



図159 SE8442とSX8440（北西から）

2 地形と基本層序

調査前の地形は、基礎を残したまま建物を撤去したために旧庁舎部分が周囲より一段高まっている状態であったが、その中の遺構面は周囲より30cm以上低かった。そのため、遺構はほとんど地山面での確認となった。いっぽう、南北両調査区では、相対的にあまり削平されておらず、南調査区東半を除いて江戸時代の遺構面が残存していた。とくに、調査区中央から西では江戸時代の焼土層面が良好に遺存しており、その下に中世や古代の面が確認できた。ちなみに南調査区での地山自身のレベルは東側に比べて西側が0.5mほど低く、それだけ、西側ほど各時代の遺構面が残りがやすかったのであろう。ただし、地形は北にも下がっているので、北よりの調査区でも東半では南調査区とほぼ同じ高さで江戸時代の遺構面が確認できた。地山は黄色ないし黄褐色の硬い礫混り層で、その下に粘土から徐々に砂へ変わっていくいわゆる大阪層群がある。検出した各井戸もその砂層をある程度掘り込んだところで掘り下げをやめている。

3 検出遺構

裁判所時代

SG8463 旧鉄筋庁舎が建てられるときに、塞がれた瓢箪形の池。それを取りまく庁舎中庭部分は未発掘のまま保存されてきたと思われていたが、池の南半が旧庁舎基

礎の下から検出された。

SX7811 明治25年(1892)に建てられた附属の南北庁舎。外側に面をもつ山石を天場がそろうように一列に並べた基壇化粧をもつもので、基壇幅7.8m、高さ0.4mある。東西の石列外面から1.2m内側に芯が通るように布掘状に溝を掘り、礫を詰め込みながら礎石となるような大き目の石を配している。

SK7802 明治時代以後の瓦も含む瓦土坑。

江戸時代初期～幕末

SE8423 南調査区東端近くにある石組井戸。上面の径1.6～1.7m、残存深さ1.25m、底には特別な施設はなし。上半の石組は抜き取られていて、下半4～5段ほどが残っていた。元豊通寶が出土している。

SX7880・SD8437・SX8440 第321次調査で検出していた土管埋設の暗渠SX7880は、調査区南東を東にそれながら北流し、調査区外にそれた後、SD8437に続くと思われる。SD8437はSE8442の手前にある長さ50cmほどの平瓦を上開きに立てて囲ったSX8440に注ぎ込む。この施設は上面の幅は0.9m、深さ0.6m以上で、SE8442との境には平たい石を立てて水をせき止める形になっている。

SE8442 厚い裏込めを備えた石組井戸で、裏込の径3.4m、深さ3.0mを優に超える。危険なため、3m以上は掘り進まなかった。掘り下げ最下面でも鉄筋コンクリートの残骸が出ており、廃絶は昭和38年の旧庁舎建設の直前であったと思われる。位置から見て、この井戸は元治元年(1864)の一乗院絵図にある井戸と同一と考えられ、礎板石を埋めた柱穴遺構からも上部に屋根をもった大型の井戸であることが確かめられた(図159)。

SD8443 SE8442の裏込に接するところから北に向かって流れる土管埋設暗渠。取り付け部分には瓦製の蓋があり、それを開閉して汚水を流したものであろうか。使用された土管はSX7880、SD8437と変わらない。

いずれにしても、SX7880・SX8440、SE8442、SD8443の関係が釈然とせず、上水、廃水の管が通っているところに井戸が掘り込まれたのか、すべてが同時に機能するものであったのか判断できない。

SX8452 昭和38年の調査でも、寢殿周囲でみつかった同種の施設で、平瓦を打ち砕いたものを縦に数条平行して並べたもの。本調査区では最大幅0.6m、5列分

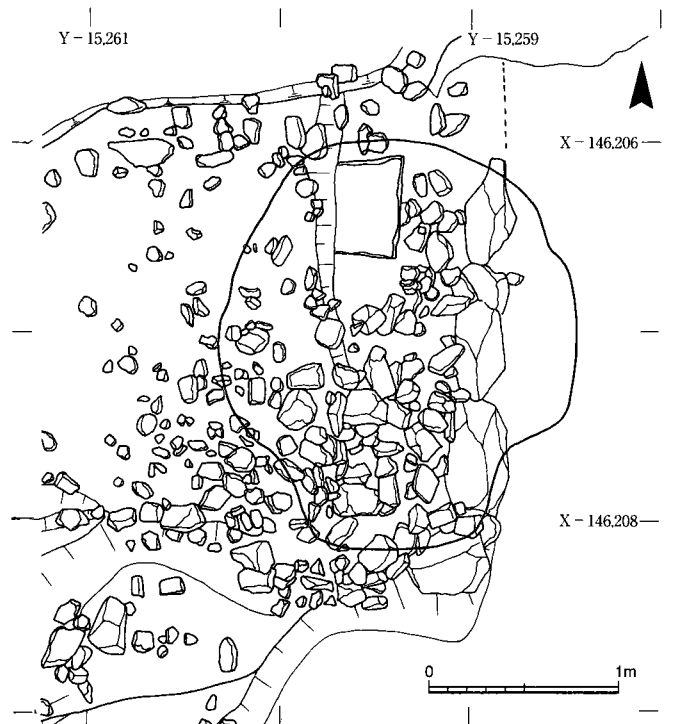


図160 SX8464とSE8465 1:40

が2.8m以上の長さにわたってみつかったが、過去の調査でみつかったものと合わせると、広く面的にあったことがわかり、寢殿西側で検出されている同種のものを雨落溝とする過去の解釈に疑義を呈するものである。おそらく、整地ないし舗装の一種であろう。

SK8480 江戸時代初期の整地の際に大量の瓦と石塊を投棄して埋め戻された大規模な土坑。東西長さ7.3mを計り、西端はSD7800を一部覆っている。

SE8465 SG8463の新造護岸施設SX8464の構造を知る目的で断ち割ったことがきっかけで、姿を現した。円形の平面形の南側をさらに突出させたような特異な平面形を呈しており、柱穴など何ら付属施設は認められない。SG8463底から1.4m下まで続いていることを確認した。掘り上げた埋土の中には13世紀頃の土師器がかなり多く認められるが新しい近世遺物も含まれることから、慶安の宸殿にともなって元治元年の絵図に見える泉水の一部かそのものであることは疑いない。

建長年間～江戸時代初期

SK8500 慶安年間に再建された宸殿に先立つ寢殿。基壇上面は火災により強く焼けており、その面が寛永の火災面と思われる。SK8500の礎石据付穴には焼土などは認められず、昭和38年の調査において推定されたようにこれが建長年間にさかのぼる可能性が高い。その後、西側に一間分基壇ともども拡張した段階の雨落溝がSD8501である。そしてこのプランがほぼ慶安年間の宸殿に踏襲される。礎石抜取穴は北調査区ではよく残っており、旧庁舎基礎部分でもSD8468の西で一部痕跡が残っていた(図163)。

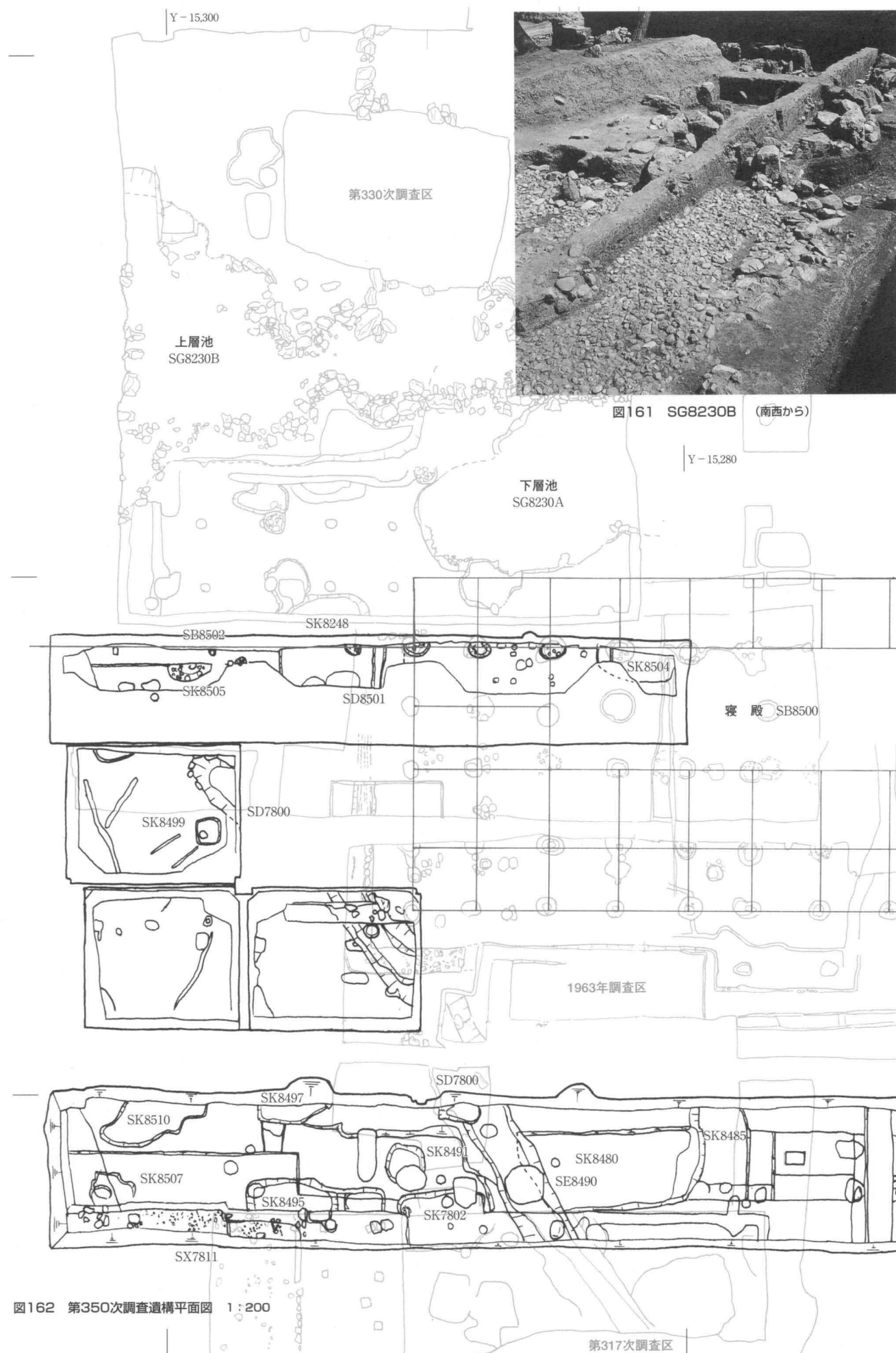


図162 第350次調査遺構平面図 1:200

SD7800 昭和38年の調査でも寝殿の遺構面の下に存在することが確かめられており、第317次調査でも確認された溝が、南調査区から北西に向かって検出された。第330次調査で存在が確認された池の遺水ではないかという憶測があったが、実際には北調査区に届く前に閉塞していることがわかった。底のレベルは北西に向かって若干低くなっているため、水がたまることになる。未掘部分も考えると、直線状というよりは蛇行しており、それ自体が景観を演出する効果を持っていた可能性がある。溝の埋土からは16世紀の土師器が比較的多く認められ、寛永の大火以前には機能しなくなっていたらしい。

SE8490 SD7800のちょうど中央に穿たれた素掘りの井戸。上面の径1.5m、深さ2.8m以上掘るも底が出ず、

危険なため底の検出は断念した。中から漆器や木製品、土器などが出土。土器の年代は、SD7800の埋没時期と近接している。

SE8445 SE8442のすぐ北東に接して存在する素掘の井戸。上面径2.1m、最下部中央付近をさらに一段掘り下げたもので最下部まで深さ3.1mを計る。土圧のためか、断面形は上窄まりとなっ

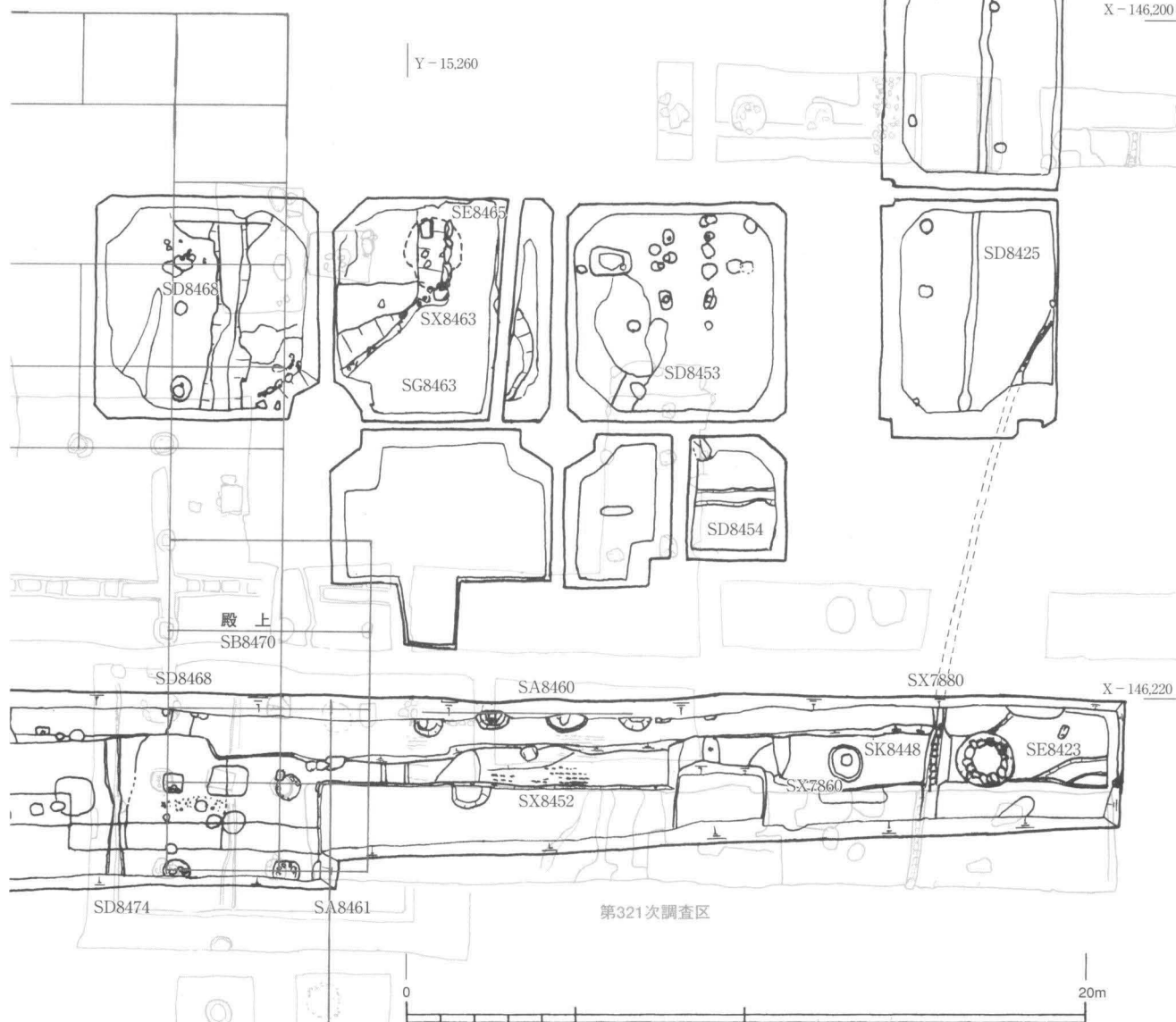




図163 SB8500 (南東から)

ている。埋め戻しの途中で、標高90.8m付近に石を敷いた足場が見られた。底に近い埋土からは多量の木質遺物が出土し、上層の埋土からは多量の土師器皿が投棄された状態で出土した。それらの年代から16世紀前半に埋められたと考えられる。おそらく、その機能を受け継ぐためにSE8442が造られたと見られる。

SA8460 南調査区の北壁で3間分が確認された一列の柱穴で、4穴すべてに柱ないし礎板が残っていた。西側から2つ目の柱穴には角柱を支える礎板にヒノキの転用材が使われていて、最外郭の年輪年代が1170年であった。転用材であることと、外側にあったであろう年輪幅をみつもと1200年を下る時期に伐採されたものであると見られ、おそらく建長の寝殿にともなう年代をSA8460に与えてよいと考えられる。

SB8470 SD8474を西側雨落溝にもつ殿上遺構。礎石抜取穴を計4箇所検出。昭和38年の調査で推測されたように、建長の寝殿に伴う遺構が江戸時代まで踏襲されたと考えられる。

SK8435 南北5.5m、東西4mの浅い土坑で、14世紀の土器の碎片によって埋められていた。

SD8425 SK8435によって北端を切られている南北方向に走る幅の狭い溝。ほぼ南北方位に掘られていること、そして埋土には水の流れた跡が認めにくいことから、敷地を限る意味をもった溝であると考え。江戸時代以前の寝殿区域を囲んだものであろう。

SK8507 上部に同時期の多量の土師器を包含した褐色土で覆われた浅い土坑。完形に近い土器を多く含む土器捨て穴的なもの。12後～13世紀前半と見られる。

SK8510 鎌倉時代の瓦を捨てた土坑。SK8507・SK8510はともに南調査区の西側一帯が鎌倉時代頃に大きく改変されたことを示すもので、おそらくすぐ南側

にあったであろう長講堂の整備との関連で造られたと考えられる。

SB8502 建長の寝殿と考えられるSB8500の北側軒柱の筋を西に延長したところで礎石の抜取穴とそれに続く小さくて平たい石が一行に並んでいる。寝殿軒から西に伸びる廊下の南柱列のものと思われる。

古代から建長年間

SD8468 殿上の西側柱筋下層にある南北溝で、底近くでは0.6m幅だが、上面では2.6mに広がる。古代の土器や瓦が出土する。基礎下寝殿東端部分でもやや東に振れた位置にあることがわかった。上層で10世紀後半の土器片が出土。寝殿成立によって埋められたと考えられる。

SK8485 西側をSK8480によって大きく切られているが、幅約2.0mの南北方向に長い溝状土坑。興福寺創建期頃の瓦を含む。

SA8461 殿上の中央柱筋に沿った形で存在する塀と思われる柱列。昭和38年にも検出されているが、今回はそのうち2個の柱穴のみが南調査区内でみつまっている。殿上に遡るものと思われる。

SK8248 第330次調査でその北半が確認できていた土坑で、東西4.8m、南北1.9m以上の広がりをもつ浅いもの。11世紀後半ごろの土器と炭を大量に含んだもので、康平3年(1060)の火災などにともなう片付け行為によるものであろう。その上に寝殿基壇がかぶっている。

SK7860 明確な落ち込みは確認できないが、地山にめり込むような形で第321次調査でも検出された銅滓などの鑄造関連遺物が出土している。

4 出土遺物

土器、木製品、金属製品、鑄造関連遺物、瓦磚類などが出土した。瓦磚類はとくに大量の瓦の出土を見たが、内訳については表22を参照されたい(第317次調査参照)。

土器・土製品

1～3がSK8248から出土した土師器皿類である。前2者がいわゆるての字口縁の皿で、3が大口径の深みのある皿である。瓦器ではなく、いまだ黒色土器がいっしょに出ている。11世紀後半ごろのものであろう。4、5は調査区西南隅の包含層やSK8507から多数出土しているもので、この一帯はその土で嵩上げされている。瓦器が共伴し、12～13世紀に位置付けられる。ほぼ同じ13世



17は外面に「御」の字が習書されている。このほかにも判読不明な文字が習書された土器が数点あるが、出土

石製品としては、SE8423から五輪塔の火輪部分が、池SG8463から硯が4点出土している。（深沢芳樹）

一乗院創建以前の時代から近代にいたる各期の遺構の存在が確認され、中でも寛永の火災にともなって廃棄された江戸初期の遺物が、その時期の隆盛振りを伝えている。この時期は皇室から法親王を向かえた時期である。また、SD7800が鑓水として機能していたのではなく、かわりに泉水SE8465が水の供給に関与していた特殊な遺構である可能性が浮上した。近世以前の寝殿附属の池に関わる施設として貴重な遺構である。遺構の保存とともに、寝殿北側の池とのつながり部分に対する調査の必要性が強く求められよう。(高橋克壽)

Ⅲ-2 平城京と寺院の調査